

---

# 佐助を異世界へ

ラハール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

佐助を異世界へ

### 【Nコード】

N4823S

### 【作者名】

ラハール

### 【あらすじ】

魔法少女リリカルなのは、転生者は最初から最強でした。の主人公の猿飛佐助を最初はD・C?の世界へ後々いろいろな世界に行きます

## 1話 佐助D・C?の世界へ

俺はなぜか白い空間の中にいる……

神「お久しぶりで〜す佐助さん」

佐助「久しぶりだな神、でどうしたの俺をこんなところに呼び出して」

神「えーとある人がこの小説の続きを書けないから貴方を別の世界に送るそうです」

佐助「すごいメタな発言だなっ！か作者！クビア編の続きが書けないからって別世界に送ろうとするな！」

ラハール「グハッ」

佐助「……まあいいでどこに送る気なんだ」

ラハール「D・C・2の世界DA！」

佐助「……よっしゃ！！平穏な世界DA！！」

ラハール「あとこれは頼みなんだけど桜の木のバグはデータトレインで消しといてあとアリシアの呪いもついででいいから」

佐助「お安い御用だ！平穏が楽しめるんだからな！」

ラハール「あと5歳からスタートで生まれは甲賀流忍者25代目当

主の息子で忍術を学んで当主である親父を超えた天才で猿飛佐助の再来って言われてるから』

佐助「わーい完全に忍者になるんだ俺」

神『いいじゃないですか結構忍者っぽい事もやってるんですし』

ラハール『それにお前の元は新釈真田十勇士の猿飛佐助と戦国B A S A R Aの猿飛佐助が元なんだし』

佐助「まあいいよ平穩を楽しめるならな！」

神『あなたに夕暮れ龍の加護があらんことを』

ラハール『そんじゃ逝って来い！』

佐助は送られた

神『さて佐助さんはヴァルクさんぐらいのフラグを立てることを祈りましょ』

ラハール『クククまあ平穩ではあるな多分』

神『ええ多分平穩ですね』

二話 初音島に到着そして桜の木のバグ消滅(前書き)

佐助「桜の木のバグを消すのか」

ラハール「うんまあ余裕だろ佐助なら」

佐助「まあがんばりますよ」

## 二話 初音島に到着そして桜の木のバグ消滅

俺は5歳からさらに3年忍びの修行をした8歳でなんか親父に18歳になったら当主になってもらうって言われたしかも甲賀流忍者で俺を超えられる人間は現在いない

佐助「フッフ俺はとうとう初音島に来たZE！いや〜久しぶりに平穩だな・・・さてとまずは枯れない桜の木に行きますか」

現在の俺はかなりテンションが高い、俺は枯れない巨大な桜の木へ向かう

〜枯れない巨大な桜の木〜

佐助「でけえな〜これが枯れない桜の木・・・いや願いを叶える桜の木か？さつさとバグをデータドレインしますか」

俺が腕をデータドレインの体勢をとろうとするといきなり声が聞こえてくる

????「ねえ君なにしてるの？」

佐助「え？なのは？なんでこの世界にまで??」

????「なのは？私は芳乃さくらって名前だよなのはって人じゃないか」

佐助「（そついえばさくらはなのと同じ田村ゆかりボイスだった

あっちの世界の方が長くて完全に忘れてた)

すみません知り合いの声に似てたもので、俺の名前は猿飛佐助です」

さくら「それで君は何してるの」

佐助「この桜の木のバグを俺の力で消すだけですけどなにか？」

さくら「!？」

佐助「ま見てな俺は不可能を可能にする男だそれに平穩を楽しみたいしなさっさと終わらせる・・・データトレイン!」

俺は死亡フラグのような台詞を言ってデータトレインの体勢をとってデータトレインする

佐助「グハッ!おいおい始めてだぞこんなに侵食率が高いのは」

俺は桜の木のバグの侵食率の高さによって血を吐いた

さくら「大丈夫!」

佐助「すみません少し寝かせてくださいそしたらすぐに侵食率が身体に馴染んで元に戻るの」

俺はすぐに桜によしかかり寝始めた

side さくら

猿飛佐助って子がデータトレインってものを桜に放ってすぐに

血を吐いて桜によしかかって寝てしまった

さくら「う、うそ・・・本当にバグが無くなちゃってる」

そう完全にバグが消えていたそれも初めから無かったように綺麗サツパリ

さくら「何十年も解析してもわからなかったのに・・・」

だが佐助のおこなったのはデータドレインあくまで元々あった桜の木のバグをドレインしたに過ぎないだからバグが消えたというよりバグを  
吸い取ったと言った方がいい

さくら「そ、それよりこんなところで寝てたら風邪ひいちゃう!」

僕は佐助君を家まで担いで連れて行った・・・重い

side さくら終了

佐助「・・・知らない天井だ」

まあお決まりのネタを言っている佐助です

佐助「まじ何処だよ此処」

さくら「目が覚めたみたいだねそれと此処は僕の家だよ」

佐助「すまないな」



さくら「気にしなくていいよ」

さくらは笑顔で言う

佐助「何で無理して笑ってるんだ？辛いなら辛い寂しいなら寂しいって言って言っただけは楽になっただろうだ？」

自分の好きな人だろうと近くににいる友達だろうと親友でも何でもいいその気持ちを受け止めてくれる存在がいるなら言えそしたら楽になるしな

それとも少し自分の周りの奴を信じてみるそれで救われる事もある現に俺もそれで救われてるしな、まあ俺で良いなら俺でも構わないからな」

俺は苦笑混じりと言う

さくら「うあ・・・ああ・・・ああ」

佐助「泣きたいなら泣け・・・今までの悲しみも苦しかったものも全て吐き捨てて楽になれ」

それから何十分もたってからさくらは泣き止んだそれと顔も赤い・・・きつと恥ずかしいんだな（完全にさくらにフラグを立てたからな佐助by作者）

幻聴だフラグを立てたって聞こえたがきつと幻聴だそうに違いない

佐助「泣き止んだようだな・・・それで吹っ切れたか？」

さくら「うん」

佐助「それならいい、そんじゃ俺は帰るとしますか、ああそれとこの家に遊びに行くと思うからんじゃねー」

俺はBASARAの佐助が消えたようにその場を去る

一話 初音島に到着そして桜の木のバグ消滅(後書き)

三話 世界に忘れられた少女(前書き)

ラハール「今回はアイシア登場&フラグです」

佐助「おいおい」

ラハール「はいどうぞ」

### 三話 世界に忘れられた少女

いや〜平穩っていいねさくらの家に遊ぶに行ったら偶然義之に合ってそのまま朝倉姉妹とも遊んだりした

俺が中学校に入ったそれから三年雪月花のメンバーと仲良くなった

放送『三年三組猿飛佐助君至急学園長室に来てください』

杏「なにやったの佐助」

佐助「・・・ばれちゃったかな麻薬組織完全破壊したの」

涉「どんだけだよ!？」

義之「あいかわずだな佐助わ」

杏「そうね」

杉並「ふっ流石だなMY同士佐助」

佐助「いや〜ね俺に麻薬を売ろうとしたからつい潰しちゃった」

茜「ほっほ〜う流石だね」

小恋「警察に捕まっちゃうよ」

常識的にそうだろうだが！俺は甲賀流忍者で次期当主でさらにチートだ警察との繋がりも深い

佐助「安心しろ警察の刑事局長は俺のダチだ！何度か頼まれごともしたからこれぐらいなら俺の罪にならん！！」

義之「そろそろ行ったほうがいいぞ」

佐助「そんじゃ学園長室に行つて来るは」

やはりBASARAの佐助のように消える・・・便利だな本当に

～学園長室～

佐助「来たぞさくら」

さくら「んにゃー！」

あやっぱりビックリしてる・・・

さくら「ビックリさせないでよ佐助君」

佐助「それで何用だそれとそこに居る人が俺に用？」

さくら「うん彼女はアイシアって言って僕の友達で頼みたい事があるんだ」

アイシア「アイシアだよよろしくね」

佐助「俺は猿飛佐助だよよろしく頼む、それでさくらは俺に頼みつてなに？」

さくら「うんアイシアの桜のバグを消して欲しいんだ」

佐助「・・・アイシアだっけお前はどなんだ」

アイシア「私？」

佐助「ああ俺はどっちでもいいだが決めるのはお前だ」

アイシア「私は・・・消せるなら桜の力を消して欲しいです」

佐助「ふっOK・・・データドレイン！」

データドレインがアイシアを貫きバグを消す

佐助「終了つと体調がおかしいとかはないか」

アイシアが軽く体を動かす

アイシア「うん問題ないよ」

佐助「問題ないなら良い、さてさくらアイシアの戸籍はあるか？」

さくら「戸籍はないよ」

佐助「わかった少しすまない」

俺は携帯をポケットから取り出し電話する

佐助「よ冬矢<sup>ちゅう</sup>アイシアって子の戸籍作ってくんない今変わるから」

アイシアに携帯を渡し冬矢の質問に答えるそれが終わったらアイシアが携帯を俺に渡す

佐助「んじゃお願いな」

俺は携帯を切ってポケットの中に入れる

佐助「戸籍は完成つとそれとさくらどけて」

さくら「いいじゃん佐助君エネルギー補充してるんだから」

佐助「まあいいとしてアイシアももうちょっとは人に頼れどんな事をさくらに願ったかは知らないが（知ってます）お前もさくらと同じだ」

アイシア「なら世界に忘れられた女の子の話聞いてくれる？」

D・C・？のアイシアルートでの話しを

佐助「それが過去は過去今は今だ、今のお前は桜の木による力をもつ受けていないから自由だ今はどうしたいかだ過去は思い出として振り返るのは良いが過去で止まるな俺が言えるのはこれだけだ」

確かに年齢的にはアイシアの方が上だが経験は負ける気はないぜ（キリッ）

アイシア「うん」

アイシアは涙を流してるがうなずいた



佐助「ああそれでいい」

反射的に俺はアイシアの頭を撫でる

アイシア「ツノノノ」

さくら「むー」

アイシアは顔を赤くしてさくらは頬を膨らましている

佐助「まあそろそろ戻るわ」

今回はちゃんと学園長室のドアから帰った

アイシア「ねえさくら私佐助に惚れちゃったノノノ」

さくら「……ライバルが増えた」

三話 世界に忘れられた少女（後書き）

佐助「作者！死ねええ！！」

ラハール「ぎゃああ！！」

佐助「チツ！死ななかつたか、オイ作者あとどれだけフラグ立てるんだ」

ラハール「あと2・3回・・・だ（バタ）」

佐助「そうか、それでは次回も楽しく読んでください」

#### 四話 まさかの転校生とクリスマスパーティー

アイシアの時から二日目

先生「転校生を紹介します入ってください」

転校生が入ってきた・・・って！アイシアかよ!?

アイシア「アイシアですよろしくお願いします」

男子生徒1「彼氏いますか!」

男子生徒2「好きな人いますか!」

その後もすぐにすぐに質問攻めをする

委員長「静かにしなさい！アイシアさんが困ってるでしょ！質問は1人づつしなさいガキじゃないんだから!!」

さすが委員長だな・・・アリサを思い出す

アイシア「彼氏はいないけど好きな人はいるよ」

へえアイシアが好きになる奴興味あるな

女子生徒1「誰々!」

アイシア「猿飛佐助君//」

アイシアが頬を紅く染めて答える

男子全員（杉並・義之除く）「ええええええええええええ！？」

佐助「・・・MA ZI DE」

男子生徒3「猿飛殺す！」

杉並・義之以外がそれに参戦する

佐助「いいよ殺せるものならね（超良い笑顔）」

男子全員（杉並・義之除く）「すみませんでしたー！」

速攻で土下座

佐助「はあまず俺は付き合ってるわけでも無いからお前らにもチャンスはあるだろ（呆）」

男子生徒4「そうだ！俺達にもチャンスはあるぞー！！！！！」

男子全員（杉なry）「おおー！！！！！！！」

委員長「うるさい！！！」

杏「バカね」

杉並「ああ」

佐助「それは俺も思った」

それから12月16日

委員長「起きなさい！あなたの票で決まるんだから！」

佐助「ふおゝ・・・なにあんの？」

委員長「人形劇とお化け屋敷よ」

人形劇とお化け屋敷か・・・

佐助「人形劇で、理由は俺が見たいから」

委員長「それでは、我がクラスの出し物は人形劇とします、準備期間があまりまいですが、皆さんがんばっていきましよう」

五話 洞窟って結構夢があるよね（前書き）

ラハール「今回は美夏が登場！」

佐助「ノエルさん達とダチだからそこまで困らなくねロボットが出てきても」

ラハール「だね、そうそう最近ツバサに出てくるエトニヌごく桜花国の夢卵って凄いなあ〜って思うんだよね」

佐助「確かにな、結構あれはリアルデジタルライズに近い気がするな」

ラハール「漫画やアニメでも小狼達も普通にシャオランご飯食べてるし空腹もあるからね、あのゲームマジでリアルとほとんど変わらないしね」

佐助「俺は結構やってみたいな」

ラハール「ある程度進んだら義之達も入れてドリームカプセル夢卵の話でも作るか」

佐助「えっ？」

## 五話 洞窟って結構夢があるよね

現在俺は杉並と義之共に洞窟に来ている

佐助「さてこのあたりだな杉並」

杉並「うむ、この気配・・・奥には間違いなくなにかが存在するぞ！！」

佐助「ああ！この洞窟は誰かが何かをするために作ったのは間違いない！魔術の研究や錬金術の研究もしくは未確認生物の隠れ家の可能性がある！！」

杉並「フツ、流石だな同志猿飛」

俺達は嬉しそうに声を弾ませながら歩く速度を上げた、その様子は宝の山を見ている子供のように・・・今の時間帯は昼休みで飯は軍事食で済ませた

義之「それにしても、こんな大きな洞窟が初音島にあったんだな」

杉並「まだまだだな・・・同志桜内よ、不思議なんてものは案外すぐ近くにあるものだ」

佐助「そうこの世界は魔法・UFO・未来人・宇宙人・超能力者など未知のものもたくさんあるこの洞窟だってそうだ」

まあ俺は幽霊・妖怪・吸血鬼・神といった奴らは友達だけど

義之「不思議ねえ」

そして杉並の持つ懐中電灯が数メートル先に空間を照らし出した、明らかに人工物らしき壁に囲まれた部屋の中央にちょうど人が入れそうな箱が置いてあり、そこから天井に向けて伸びていた

佐助・杉並「「素晴らしい!!」」

俺達の声はハモツタ

義之「こ、これは……」

杉並や佐助のように信じていなかった義之の驚きは大きかった、この箱はカプセルのような形でガラス状の蓋がついており側面から突き出したパイプが天井に繋がっていた

杉並「なるほど、そう来たか」

佐助「これは別の意味で予想外だったな」

杉並はポンと手を叩き嬉しそうな表情で佐助は納得したように頷いた

義之「そう来たか……とは？」

杉並「わからないか？この形状、このシチュエーション……思いつくことは1つだろう？」

佐助「そう思いつくものは1つだ」



義之「いや、まったくわからん」

杉並「……………」

佐助「……失望したよ義之」

杉並はゴミを見るような視線で佐助は義之に失望していた

佐助「ダメだな義之はそう思わないか杉並」

杉並「ああ、まったくその通りだ同士猿飛」

義之「酷くないか!!」

佐助「はあ、コールドスリープって流石に聞いた事あるよな」

佐助は溜め息を吐きながら仕方がなく説明する

義之「コールドスリープって、SFとかに出てくるあれか？」

杉並「そうだ、生きた人間を冷凍し、未来で目覚めさせる技術だ、得てして、その装置はこのような形をしている事が多い」

義之「ってことは、この中に冷凍保存された人間が入っていると？」

佐助・杉並「その通り!!」

義之「アホか」

興奮したように叫ぶ2人の言葉を一蹴した。まあ佐助がやろう

と思えば凍りつかせて出来ない事もないが

杉並「まあ、確かめてみればわかる」

義之「・・・嘘だろ？」

カプセルの中には本当に女の子が眠っていた

佐助「どうやら、生きているみたいだな」

義之「そんな・・・」

佐助の言葉に義之は大きく首を振った、こんなところに眠っている少女がいるなどとても現実の事などとは思えなかった

杉並「しかし、呼吸をしているとゆうことは、コールドスリープとは違うようだな、ならば、ハイバーネーションの可能性もあるな」

自問するように呟く杉並、義之はじっとカプセルの中を見つめている

義之「誰なんだ、これ？」

佐助「いや、流石にわかんねーよ調べてみなきゃ」

杉並「ああその通りだ」

佐助と杉並はそう言いながら周囲を歩き始める

彼女の両腕につけられたコードは、カプセルを経由してパイプの中へと続いている、このパイプを伝ってどこかに接続されているのだ

ろう

佐助「おい義之ここを見てみる」

反対側に回り込んだ佐助がカプセルの一部を指さした

義之「どうした？」

義之は佐助と杉並に近づき、佐助の示した部分に視線を落とし、小さく文字のようなものが書かれています。義之はじっくり見ようと中腰になる

義之「あ……」

杉並「ん？どうした、桜内？」

義之「なんか膝に嫌な感触が」

そこまで言うとピコンピコンと電子音が室内に響き始める、義之の膝に押しはならないものを押しつらしい

義之「ど、どうする？」

佐助「まあ押したものはしょうがねえ、なるようになれだ……ここでこれを守る敵が出てきたら面白いのに（ボン）」

杉並「そつだな」

佐助と杉並はすごく軽い口調で言う

義之「……今のなんだったと思う?」

杉並「……さあな、考えられるとすれば……」

義之「考えられるとすれば?」

義之の質問に、佐助と杉並はカプセルの方に顔を向ける

杉並「やっぱり、こついうことだな」

佐助「ああ」

杉並の視線を追って義之は中を覗き込むと、それまで眠っていた少女が睨むような目で義之を見ていた

義之「ゲツ!?!」

思わず身を引く義之と同時に少女は勢いよく身体を起こすだがカプセルは空いておらずゴソツと頭をぶつけ頭を抱えていた

少女「貴様つ、謀ったなあ!?!」

頭を押さえながら大声で義之に叫ぶ

義之「謀るものにも……ってか、これは俺のせい?」

杉並「難しいところだな」

少女は中でなにかを操作すると蓋が左右に開いていく、今度こそ少女は身体を起こし、チツ短く舌打ちをした

少女「貴様か？貴様が美夏を起動したのか！？」

美夏と言う少女が義之に向かって問う

義之「き、起動？」

美夏「なぜ美夏を起こしたのだ？なにが目的だ？」

感情を抑えて言うが明らかに敵意が込められている

佐助「ただの偶然だよ、こいつが屈んだ拍子に偶然起動のスイッチを押したんだよ」

佐助は分かっている空気を読まずに言う

義之「ば、馬鹿か佐助はっ！！」

声を荒げて言う義之だが遅かった、美夏がカプセルから出て身体の調子確かめるように伸びをして、グツと拳を握りしめる

美夏「そうか・・・膝が偶然にな、ふざけた話した」

義之「ちょ、ちょっと待て！！お、落ち着いて話そう」

そう義之は言ったがじわじわと近寄ってくる

美夏「覚えておけ、美夏にはこの世界で嫌いな物が二つだけある、一つはバナナ、そしてもう一つが・・・人間だ」

義之「か、勝手に起動させたのは謝るよ、ごめん、でも暴力でなにも解決しないと思うぞ」

美夏「美夏はずっと眠っていたのだ、それを無理やり叩き起こした拳げ句、偶然だと！？それでおさまると思っっているのかっ」

美夏は大きく右拳を振り上げ義之に向かって殴りかかってきた、だがそれは佐助によって止められた

佐助「はいはいそこまで・・・たくっ暴力は流石に行き過ぎだ、それと水越先生さっさと出てきてください」

水越「どうやら間に合ったようね」

佐助「いやぜんぜん、俺が止めなかったら義之が殴られてました」

水越「自業自得よ、それとあなたたちだったのね、こんなオイタをしたのは」

呆れたように溜め息を吐く水越先生

佐助「どうせこいつを連れに来たんでしょ」

美夏方に視線をやる

水越「話しが早くて助かるわ」

水越先生は美夏に視線を向ける

水越「お目覚めはどう？HM-A06型ミナッ」

美夏「聞くまでもないだろう、最悪だ!!」

水越「ごめんなさいね、私達も起こすつもりはなかったの、でも起きてしまったからには、その身柄を預けてもらわなければならないの」

水越先生がそう言うつと背後の男達がゆっくりと距離を詰めていく

美夏「誰も逃げたりなんかしない」

水越「そう、素直で助かるわ、それじゃあ・・・」

男達「了解しました」

男達は美夏を取り囲み洞窟の出口に誘う

美夏「貴様ら名をなんと言う?」

立ち去ろうとした少女が問いかけてくる

義之「え、あ・・・桜内義之・・・」

佐助「猿飛佐助だ」

美夏「桜内と猿飛か、その名前覚えておくからな」

義之と佐助を一睨みして男達に誘導されて出て行く

水越「さて、あなたたちのことなんだけど」

水越先生は佐助と杉並と義之に剣呑な視線を向ける

水越「入り口にある『立ち入り禁止』の看板が見えなかったの？それに有刺鉄線を張り巡らしておいたはずだけど」

義之「あ、それは・・・」

佐助「いや、立て看板は気付かなかったし俺らが来たときには有刺鉄線は切られてましたよ、なあ杉並・義之」

杉並「ああ」

義之「あ、ああ」

佐助が普通に嘘を言う、立て看板は承知してたし有刺鉄線は佐助がどこから出したのか分からないがクナイで切った

杉並「それよりも、さっきの娘は？確かHM-A06型とか言っていたようですが」

水越「はあ、しょうがないわね」

水越先生は諦めたように肩を落とす

水越「彼女はロボットよ、HM-06型、開発コードはミナツ」

義之「ロボット!?!?」

佐助「（ノエルさん達の方が使われてる技術的には上かな?・・・）



「ただでコールドスリープの方が俺的にはみたかったなあ」

ロボットの知り合いでありダチがいる佐助は全然驚いてない  
ゆうよりコールドスリープの方に期待をしていた

水越「あの娘は特別なの、だからここで眠らせていたのよ」

杉並と義之がコソコソ喋っているが佐助は参加しない

水越「こらっ、なにをコソコソと話してるのっ」

義之「すみません」

義之は慌てて水越先生に頭を下げる

水越「そうね・・・悪いと思ってるなら、ひとつ仕事を手伝っても  
らおうかな」

義之「俺に出来る事なら」

水越「じゃあ、その時が来たら呼び出すからよろしくね・・・と  
ゆうことで今はとっとと帰りなさい、もうすぐ授業が始まちゃうわ  
よ」

義之「は、はい、失礼します」

一礼して義之と杉並と佐助は出口に向かうべく歩き始めた

水越「あ、そうそう、わかっているとと思うけど、ここで見たこと全て  
忘れなさい」

これはお願いじゃないから、この意味・・・わかるでしょ？」

杉並「もちろんです」

義之に代わって杉並が言う

水越「うん、それならいいわ」

水越先生はいつものような笑みを浮かべた

六話

一日の学校終了そして……（前書き）

ラハール「佐助が戦いバれます」

佐助「なにが？」

ラハール「さあ？」

佐助「うぜえ」

## 六話

一日の学校終了そして・・・

義之が食べ物に釣られて馬鹿なことをやった後全校集会に行った

義之「で？今日は何のための全校集会なんだ？」

杉並「ふっ、決まっておろう、クリスマスパーティーに向けての連絡事項だ」

涉「もう、来週だからなクリパ」

佐助「眠いだけだな」

眠そうに欠伸をする佐助

義之「なるほどね、で、杉並と佐助は今回なにをするんだ？どうせ裏で色々と動いてんだろ？」

杉並「今のところは企業秘密だ、ただ、過去最大規模の祭りになる……とだけは言っておこう」

佐助「ま、杉並はなにやるかしらねえが俺のところも面白いことになるぜ、ククク」

楽しそうに言う二人

涉「なにすんのも勝手だけど、俺を巻き込まないでくれよ」

義之「俺も勘弁してくれ」

そう言つて前を向く義之達

まゆき「ただいまより、全校集会を開会します」

開始のアナウンスが流れる

まゆき「まず初めに、先生方から幾つか連絡事項があります」

先生方からの連絡事項を言い終わる

まゆき「はい、ではクリスマスパーティーについての連絡事項があります、生徒会長の朝倉音姫さん、お願いします」

音姫「それでは、私のほうから連絡いたします」

音姫「例年通り12月23日から25日にかけての三日間、我が風見学園ではクリスマスパーティーを開催します  
一般の方への公開を行なうのが23日・24日の二日間、25日は学校関係者のみの後夜祭となります」

涉と義之がくだらない事を話してる最中も話は進む

音姫「準備期間としまして、来週の月曜日から午後の授業を」

未だにくだらない会話をしている涉と義之

音姫「とは言つても授業の一環として行なわれる行事です、各人とも節度を持った行動を心がけるよう注意してください

佐助「(うん、無理)」

無理と心の中で断言する佐助

音姫「それでは皆さん、楽しいクリスマスパーティーにしましょうね」

義之が周りのむさい男子に絡まれている、そして全校集会が終わり、だらだらと教室に戻る

小恋「やっぱり憧れるなく、音姫先輩」

涉「だよな！、なんつーか最高のお姉ちゃんって感じ？」

小恋「うん、頼りがいあるし、優しいし、きれいだし」

涉「あー、羨ましいな、この野郎は！」

佐助「そうなのか？」

アイシア「佐助はわかんないの」

佐助「ああ」

本当に不思議そうに言う

茜「って、噂をすればだね」

茜が指さした先にはたくさんの生徒から囲まれている音姫の姿があった

生徒1「会長っ！一般来場者に対する誘導と安全確保のための人員について」

音姫「その件に関してはアスの会議での課題とします、時間までにたたき台の作成をしてください」

生徒1「はい、わかりました」

生徒2「音姫先輩、パーティー期間中の円滑な案内放送を行うため、放送部との」

音姫「あ、放送部の部長さんと話をつけてありますので、あとは現場サイドで打ち合わせをおこなってください」

生徒2「了解です、音姫先輩」

生徒3「朝倉さん、お料理クラブ主催臨時食堂の食材についてですけど」

音姫「昨日、業者に発注を行いました、来週の火曜には届くはずになっています、詳しくはまゆきに確認してください」

生徒3「はい、高坂さんに確認します」

声をかけられては迅速に答える音姫だが音姫を囲む人は減る様子がない

義之「大変そうだな、相変わらず」

杏「クリパまであまり時間がないから」

小恋「でもすごいよね、てきぱき仕事をこなしていった」

渉「なんつーか、完璧？理想？最強？」

佐助「え？あれぐらい出来て普通じゃね」

アイシア「普通じゃないからね、佐助」

平然と常識外の発言をする佐助にツツコムアイシア

茜「佐助君がおかしいだけだからね、音姫先輩全然気取ったところとか無いしね」

茜からおかしいと言われる佐助

小恋「うん、誰に対しても平等だし、ほんとにかっこいいな」

佐助「平等？ありえないな、義之が絡むと義之優先に変わるぞ」

杏「それが例外なのよ」

音姫「あーっ！弟くん、みつげえ！」

そして義之に目が合い人ごみを掻き分け音姫が駆け寄る



佐助「義之、速攻でホックをしめろ、それで被害は少なくなる」

義之「お、おう」

すぐにホックをしめる義之

アイシア「優しいね、佐助」

佐助「そんなんじゃないよ、面倒ごとはゴメンだから」

アイシア「そうなのかな」

杏「佐助が注意しなかった確かに面倒ごことが起きたけどね」

だが佐助の注意だけで済めばよかったが

音姫「あ、そうそう、弟くん、この後なんだけど時間ある？」

周りの男子に睨まれるのと脅しを受けて断ろうとする義之だが

佐助「用事は無いぞ、別に俺が変わりにやっても問題ないものだからな」

義之「ちよ、佐助！」

音姫「本当！」

佐助「ああ、邪魔者は俺が排除するから楽しんで来い」

音姫「うん！ありがとう佐助くん！」

その後まゆきが来て音姫を連れて行った

佐助「じゃましようとするなら……殺しちゃうぞ」

周りの男子に忠告を入れとく佐助

男子共「は、はい!」

杏「……相変わらずね」

ちよつと溜め息気味に言う杏

佐助「携帯携帯」

携帯を取り出して由夢に電話をかける

佐助「義之と音姫と一緒に出かけることになったから早めに校門で待機しといたほうが良いぞ」

そう言っつてすぐに携帯を切る

小恋「ひ、酷いよ佐助君」

佐助「ん?そうか??」

杏「修羅場を作っつて自分は楽しむつもり?」

佐助「いや、俺は義之のことが好きな奴には平等にチャンスを作っつてるだけだよ」

茜「流石だね」

佐助「まあね」

なんだかんだ楽しんでる佐助である

そして帰宅時間

アイシア「佐助ー、一緒に帰ろ」

杏「佐助、一緒に帰りましょ」

ほとんど変わらないぐらいに帰りの誘いを受けた

佐助「別にいいぞ」

校門まで出たところで後ろから声が聞こえた

さくら「佐助君！一緒に帰ろー！！」

後ろからさくらに抱きつかれる

佐助「はいはい、ならクレープ食ってくか？」

さくら・杏・アイシア「うん！（ええ）」

桜公園にクレープを食いに行く事にした

だが桜公園に人一人いなかった

佐助「（魔力が微弱だが感じる・・・チツ、人払いの結界が張られてやがる！）」

アイシア「誰もいないね」

さくら「うーん、こんな事なかったんだけどな」

佐助「（どこだ・・・どこに術者がいる）」

佐助は辺りの気配を探り術者を探す

杏「佐助、どうしたの？」

佐助「（・・・いた！）そこ！！」

瞬時にクナイを出してなにも無いところに投げる

謎の男「ほお、私の結界に気付き気配まで探り当てるとは、なかなか」

佐助「・・・」

佐助はクナイを構え警戒する

謎の男「私はヨハネ・ブレイス、芳乃さくらを渡してくれれば危害は与えんよ」

さくら「私になにかよう?」

ヨハネ「なに、あの桜の制御に君が必要なだけだ」

佐助「それでさくらを渡せ・・・か、はいそうですかかって渡すかよ  
さくら・杏・アイシア目を瞑って耳を押さえる、ここから先は裏の  
世界だお前らは来てはいけない世界だ」

ヨハネ「死んでもらう!」

ヨハネがナイフで心臓を刺そうとするだが佐助の心臓に当たる  
よりも速くヨハネの腕を下から切り落とす、鮮血を噴き上げ佐助の  
制服と顔にかかる

ヨハネ「う、腕が……腕が……!」

佐助「黙れ、腕一本で騒ぐな」

そのままもう片方の腕も切り落とす

ヨハネ「う、うあ、ああ」

佐助「さくらを桜の制御のための生贄にしようとしたんだ、もとか  
ら殺される覚悟はあったんだろ?」

今度は右足を切り落とす

佐助「殺される覚悟が無いのに人を殺そうとしてんじゃないぞ」

そして左足を切り落とす

佐助「俺のダチに手を出そうとしたんだ、これで全てが終わる・・・  
終焉だ」

終焉の死を与える影を出しヨハネを完全に殺す

佐助「さて、どう説明するかな」

さっきまでの殺気はなくなる佐助

佐助「すまないが、俺の家に来てくれないか？」

説明をするために

## 六話

一日の学校終了そして・・・（後書き）

佐助「こうゆうことかよ」

ラハール「うん、ちょっと残酷にしてみた」

佐助「型月の世界とか恋姫なら普通にOKだがここはD・C・？の世界だぞ！！」

ラハール「戦闘が無かったら俺じゃない気がした」

佐助「いや、でも」

ラハール「これが無かったら忍びとかバレ無いような気がしたんだ！」

佐助「諦めよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4823s/>

---

佐助を異世界へ

2011年11月24日23時45分発行